

武蔵野日曜集会

洗足

――ヨハネ伝第13章1～51節――

1984年11月4日(武蔵野)

小池辰雄

極^{きわみ}まで愛し給えり サタンは実在している 我もし汝を洗わずば汝われと関係^{かかわり}なし 罪とは自己中心 贖罪と聖霊の注ぎ お前たちも互いに足を洗え 我となんじとの関係は永遠なり

【ヨハネ13・1～15】

1 過越^{すけ}のまつりの前に、イエスこの世を去りて父に往くべき己が時の来れるを知り、世に在る己の者を愛して極^{きわみ}まで之を愛し給えり。2 夕餐^{ゆうげ}のとき悪魔、早くもシモンの子イスカリオテのユダの心に、イエスを売らんとする思を入れたるが、3 イエス父が万物をおのが手にゆだね給いしことと、己の神より出でて神に到ることとを知り、4 夕餐^{ゆうげ}より起ちて上衣^{うわぎ}をぬぎ、手巾^{てぬぐい}をとりて腰にまとい、5 ついで盥^{たらい}に水をいれて、弟子たちの足をあらひ、纏^{まと}いたる手巾にて之を拭^{ぬぐ}いはじめ給う。6 斯てシモン・ペテロに至り給えば、彼いう『主よ、汝わが足を洗い給うか』7 イエス答えて言い給う『わが為^なすことを汝いまは知らず、後に悟るべし』8 ペテロ言う『永遠に我が足をあらひ給わざれ』イエス答え給う『我もし汝を洗わずば、汝われと関係^{かかわり}なし』9 シモン・ペテロ言う『主よ、わが足のみならず、手をも頭^{かしら}をも』10 イエス言い給う『すでに浴したる者は足のほか洗うを要せず、全身きよきなり、斯く汝らは潔し、されど悉^{しつじ}とくは然^{しか}らず』11 これ己を売る者の誰なるを知りたもう故に『ことごとくは潔からず』と言い給いしなり。

12 彼らの足をあらひ、己が上衣^{うわぎ}をとり、再び席につきて後いい給う『わが汝らに為したることを知るか。』13 なんじら我を師また主となう、然^{しか}か言うは宜^{うべ}なり、我は是^{これ}なり。14 我は主また師なるに、尚^{なほ}なんじらの足を洗いたれば、汝らも互いに足を洗うべきなり。15 われ汝らに模範を示せり、わが為ししごとく、汝らも為さんためなり。

● 極^{きわみ}まで愛し給えり

1 過越^{すけ}のまつりの前に、イエスこの世を去りて父に往くべき己が時の来れるを知り、世に在る己の者を愛して極^{きわみ}まで之を愛し給えり。



いよいよもう最後の一週間です。「過越の祭」はマタイ伝26章にも出てますが、いわゆるニサンの月の14日から始まる。そして、過越の祭のあとに除酵祭が――種なしのパンを食べる祭、これも26章に出てます――15日から21日まで、それで一週間ということになります。

「世に在る己の者を愛して極^{きわみ}まで之を愛し給えり」

という。「極みまで」というのは「エステロス」と言つて、「テロス」は「終末」という意味ですから、「終末まで」と――解釈の仕方はいろいろあるが、むしろ一義的に解釈しない方がいいと思う――キリストがこの地上における、いよいよ最後のぎりぎりまでという意味が一番普通でしょうね。それからもつと地上の歴史の終末までという気持も表して、「愛し給えり」という完了形を未来完了的に預言的な完了形にとる言い方もありますし、それから、「極みまで」を副詞的に、「非常に」という気持でとる人もあるし、いろいろあります。言葉というものはただ一義的に解釈しきれるものではないので、それらの気持を含めたらいいと思います。

キリストのこの「愛」という言葉の中には、

「キリストは愛した」

ということと、

「今愛している」

ということと、

「いつまでも終りまで愛する」

という、この過去・現在・未来が全部この中に入っている。それはヘブル書に、

「昨日も今日も永遠に変わらざるなり」

とあるとおり、キリストの義も愛も永遠的なものを持っています。こちらの如何によつて変わるような、そんな愛ではないですから。「己の者」というのは、本当に自分に信頼した弟子たちという気持が非常にあるし、また弟子をもう少し広くすれば、彼について来た人たちです。

●サタンは実在している

²夕餐^{ゆうげ}のとき悪魔、早くもシモンの子イスカリオテのユダの心に、イエスを
売^{おも}らんとする思^{おも}いを入れたるが、

サタンというのが働きます。今の人は、「サタン」なんて言つたつて、何か物語みたいにしか思わないでしょうけれども。「悪しき霊」です。霊の世界はいろいろあります。また、段階もあります。もともとサタンは天使であつたのが、傲慢の気持でひっくり返ってしまったわけです。旧約から始まっている。ゲートの有名な『ファウスト』は、そのサタンの手下みたいなメフィストフェレスが活躍しますけれども。これはただ人間の心理的な状態ではない。実在している。それがイスカリオテのユダに働きかける。ユダというのは非常に



これまた優れた弟子なんです。優れた人というのはヘタすると危ない。自分が優れているものだから、つい霊的傲慢になる。

「私も神の如く」

という、霊的傲慢というのが最大の罪なんですから。「一如」という言葉を間違わないようにしてくださいよ。一番私は大好きな言葉なんですけれども。神の絶対恩寵の力で一如となるのでね、

「こちらが神の如くならう」

というのは、これはサタンなんです。禁断の木の実を食べさせようと、アダム、イブに、

「お前たちは、これを食べれば神の如くなるぞ」

と誘っているでしょ。あの「神の如く」がサタンの言葉です。「一如」というのは、神の本願によるものであって、神・キリストの本願によつて、一如となっていく。浄土真宗と同じ角度です。弥陀の本願の効力ということ。

優れた弟子の一人が、ユダがサタンに誘われる。マルチン・ルターも、

「時々、これは聖霊か悪霊かと迷ったこともある」

というようなことを言ってます。しかしながら、我々は絶対に聖霊か悪霊かと迷わない。十字架がはっきり立っているところに悪霊は働かない。十字架がボケてしまうと危ない。いわゆる霊的なんて言い出すと。十字架は贖いです。十字架によつて聖霊がやって来るのであって、十字架を土台にしない霊は危ない。

●我もし汝を洗わずば汝われと関係なしかかわり

3 イエス父が万物をおのが手にゆだね給いしことと、己の神より出でて神に到ることを知り、

やがて天界に行つて、一切を神さまに委ねられる。

「神の右に座する」

という言い方をした。神より出でて神に帰る。キリストはこういう運動をしているわけだ。地上に地獄まで下りて行つた。そしてまた神に帰る。我々もキリストの救いより出でてまたキリストに帰ると言つたつていいくらいです、

「ついにキリストの姿に化するなり」

というのはね。「悔改」という字は本当は「帰り行く」という字ですから。回帰する、めぐり帰ることで、「悔い改める」ではない。

「汝ら、悔い改めよ」

というのは、

「汝ら、立ち帰れ」

ということですよ。



「我に帰れ、我にきたれ」

と同じことです。如来、如去という。何処に去らんとするか、神のもとにと。キリストはそうなんです。

4 夕餐より起ちて上衣をぬぎ、手巾をとりて腰にまとい、

非常に劇的に、目に見えるように書いてある。

5 ついで盥に水をいれて、弟子たちの足をあらひ、纏いたる手巾にて之を拭

いはじめ給う。

みんな裸足ですから、食前に足を洗うということは普通、イスラエル人はみんなやっているところが、自分で足を洗わないで、キリストがそのお膳立てをして、弟子の足を洗い始めた。それでびつくりしてしまつたわけだな。人の足を洗うということは召使や奴隷のやることです。裸足ですから、足の裏が一番汚いから。

6 斯てシモン・ペテロに至り給えば、彼いう『主よ、汝わが足を洗い給うか』

「ペテロ」はキリストからもらつた名前。

「私の足をお洗になるんですか。先生、とんでもない話ですよ」

と、こういうわけだ。

7 イエス答えて言い給う『わが為すことを汝いまは知らず、後に悟るべし』

「なぜ、私がこういうことをしているか、今はわからないだろう。今にわかるぞ」

と。キリストはただ親切というようなことでやっているわけではない。これは親切どころのさわざではない。キリストのなさることにはみな深い内容がある。ところが、ペテロの方はあいかわらずペテロらしい答えをしている。

8 ペテロ言う『永遠に我が足をあらひ給わざれ』

「いつまでもそんなことを決してなさらないでください」と。

イエス答へ給う『我もし汝を洗わずば、汝われと関係なし』

この言葉は非常に大事な言葉です。キリストの発した言葉のうちで一番大事な言葉の一つです。

「我もし汝を洗わずば、汝はわれと関係なし」

と。ここのところでは、「汝の足を」とは言つてない。「汝を洗わずば」と言っている。お前と私との関係は、キリストと私との関係は、「足を洗う」という関係なんです。洗足という関係。

9 シモン・ペテロ言う『主よ、わが足のみならず、手をも頭をも』

「足ばかりでなくて、それではみんな洗ってください」

と、こういう言い方をした。ペテロらしいね。

10 イエス言い給う『すでに浴したる者は足のほか洗うを要せず、全身きよきなり、



足を洗えばもう全身はきよいんだと。いわゆる相対的な世界でないことをキリストは言っている。

斯く汝らは潔し、されど悉くは然らず^{（イ）}。これ己を売る者の誰なるを知りたもう故に『ことごとくは潔からず』^{（二）}と言ひ給ひしなり。

●罪とは自己中心

「汚れ」というのはもちろんキリストにとっては「罪」です。罪を潔める。「足」は罪の象徴なんです。罪というのは自己中心ということ。人間はみんなエゴイズムを持っている。自己中心を。

個人も社会も国家もみんなエゴイズムです。だから、戦争なんてことを始める。国際関係も、みんな協定してもダメなんだ、表向きばかりで。陰では武器を造っているんだから。ただ武力のバランスだけとっている。とんでもない。いつわりの平和だ。人間同士の間には絶対に平和は来ない。神さまとの平安がないところには平和は来ない。この縦の関係をみんな忘れている。横ばかり平和、平和と言ったってダメだ。

「神さまとの関係をちゃんと立てろ。そうしたら、平和なんて言わなくなったって、平和ならざるをえなくなるぞ」

と。誰もそのことを言わない。政治家はそこに気がつかなければダメです。「まつりごと」というのは本当は神さまに代わってすることを「まつりごと」と言う。「まつり」というのはそういう宗教的な言葉なんだ。横系ばかりで縦系がないから、そんなものは布にならない。地球を見るときにも、経線・緯線と言うでしょ。そうすると位置がわかる。

だから、神に愛されて、

「神を愛するということと人を愛するということは一つだ」

とキリストが言われたのは、

「経線と緯線は離すわけにはいかないぞ」

ということ。我々の衣が既にその真理を表している。大事なのは経線なんです。縦の関係。モーセの十誡もそうでしょ。まず縦のことを言っている。

「我のほか何者をも神とすべからず」

と。神との関係です。

「いかなる偶像も刻んではいかん」

「安息日を守れ」

と。それから、

「父母を敬え」

というのはちょうど縦と横とがまんなかになっているところです。父母との関係は縦でしょ。しかし、これは地上の関係だから横でしょ。そういう縦の関係の立ってないのが「罪」な



んです。自己中心は縦の関係が立たない。神さまの世界を忘れている。

ガンジーが殺されたね。あのお父さんは偉かった。非常に世界のことを憂いていたと昨日、テレビで言っていた。

「もうこんなことをしていれば、世界は勝ちも負けもない。全部滅びてしまう」

ということも預言している。正直、今は終末的な危機的な世界です。21世紀は無事にくるかこないか。まあ呑気だね、一般に日本人は。

私は烈々たる詩を書くから。

「それで第3次戦争をくい止めてやろう」

と思っっているくらいです、ソ連とアメリカの責任者が読めば。日本語は読めないからドイツ語で書かなくては。12年かかるから、ちよつと困ったな、それまでに戦争が起きてしまつたら。

だから、キリストは贖罪で――お釈迦さんは大慈大悲――足を洗う。エゴイズムを全部とってやる。

「エゴイズムは一番やつかいなものだ。それをキリストは除けた人だ。とてもかな

わん」

とナポレオンが死ぬ時に言っている。彼は最後にキリストに平伏した。^{ひれふ}どんな英雄豪傑もキリストにはかなわん。

●贖罪と聖霊の注ぎ

この「足を洗う」というのは正に、罪を贖うという贖罪の意味と同時に、水は聖霊を表すので――清めると言いましても、贖罪したあとで本当にそれが健やかに、心身が心も体も本当に力を得る――「洗足」は贖罪と同時に聖霊の注ぎを表している。水を注いでいるんです。でなければ洗えない。

だから、私は昨日読んでいて、なるほど洗足というのは今までは贖罪とばかり思っていたけれども、贖罪と同時に聖霊の注ぎであつたと気がついた。

「そのエゴイズムの中心を取つたら、全身は潔い」

とキリストが言われた。

「他は洗う必要はないんだ」

というのはその意味です。

人間はみんな地上にあるかぎり欠陥がありますよ。心の欠陥もあるし身体の欠陥もある。いいですよ。けれども、その欠陥を乗り越えていく。また、いろんな運命にでつくわします。悲しんだり喜んだり、うまくいかなかったり、躓いたり転んだり、まあたくさんいろんなことがあるわ、人生というのは。しかし、そんなことにでつくわせばでつくわすほど、いいですか、逆に力がくるのがこの福音の世界なんです。それを整えるのではない。逆に力



がくる。それがこの聖霊の世界ですから。

贖いの土台にきているところの聖霊の世界。そうしたらば、何だかしらんけれども、

「力が入ってきた、病氣も治ってしまった、勉強もできるようになった」

なんていうようなことが自然に結果してくる。自然に。それを求めているのじゃないですよ。元ができれば自然にそれが直っていくというんです。いわゆる御利益教ごりやくではない。

実は昨日も、ある女の方が、両方の足の関節がうまくなくて、ヨッチラヨッチラと歩けるか歩けないかという。それで、私が手を置いて祈ってあげた。私が祈るときは自分是从らっぽですよ。ウワーツとキリストの力が来ますからね。まあ1分か2分だろうね。

「はいつ。治りますよ、大丈夫です」

と。そのうちにもうすっかり治ってしまった。ピンピンしちゃった。

「どうしたんでしょうか？」

と言う。

「どうしたんでしょうかじゃない。キリストの力が働いたんだ」

と。私はただ言葉で語っているのではない。キリストの直弟子の次元に限りなく進んでいくので、そういうことが起きるのだから仕方がない。何も小池先生だからではない。ただ私はキリストですから。

皆さんも、キリストになれば、みんなそれは自分で驚くようなことが始まる。そこが、私が言っている無の世界の素晴らしきなんです。自分がなくなる。

「我もなく世もなし、ただキリストあるのみ」

という、その世界に自分を突入してみろ。もの凄い燃焼になる。だから、私は「烈々たる」と言っている。火のごとく。私は火のような人間だから。霊火なんです。

これは悟りの無ではないですよ。キリストの十字架があなた方にくださるところの絶対無の世界です。もう無我、我は無い、我執は無い。絶対恩寵です。誰でも無条件に与えられる。そこには無限無量が来る。それは聖霊です。そこには必ず聖霊が来る。

そういう十字架を受けとらないから、いつまでたっても聖霊がやってこない。普通のキリスト教はみんなそれですよ。だから、わたしは

「キリストの直弟子の次元に帰れ」

と言う。内村先生も素晴らしいけれども、まだ足りない。それは次元的には使徒たちになわんですよ。そんなことを私は言うものだから、

「小池はなまいきだ」

なんて言われる。なまいきでも何でもなし。本当のことを言っている。内村先生をけなししているわけではない。もちろん内村先生の全集を大いに読んでください。素晴らしいです。けれども、パウロさんの次元からはズレている。

まあ、とにかく、パウロ、ペテロ、ヨハネ。何といっても、キリストの直弟子の次元は



本当に凄い。使徒行伝を見ればわかるでしょ。けれども、

「二千年前はそんなこともあったろうが」

なんて、普通はみんなそう思っているんだ。二千年前も今も、活けるキリストは同じなんだからね。

「洗足」というのは、贖いでありまた同時に聖霊の注ぎであることに気がついた。「潔い」と言っても、

「さあ、それでは私はどれだけ潔まりましたか」

なんて、また潔め派がいろんなことを言っている。「どれだけ潔まりましたか」ではない。根底的には100%潔められているのです。

ただ、相対的な現実、我々は矛盾構造です。けれども、奥の世界でははっきりとその世界が来ている。絶対無即絶対無限無量の世界が来ている。御霊はキリストの光であり、生命であり、愛である。光・生・愛。それは霊光・霊生・霊愛である。御霊です。キリストの霊でなければ、「御霊」と言っただけです。十字架の贖いしたのはキリストだけです。

●お前たちも互いに足を洗え

¹² 彼らの足をあらひ、己が上衣をとり、再び席につきて後いい給う『わが汝らに為したることを知るか。¹³ なんじら我を師また主となう、然か言うは宜なり、我は是なり。¹⁴ 我は主また師なるに、

「主」というのは僕に対する主ですから。贖い主ということ。「師」というのは、本当のことを教えている人。

尚なんじらの足を洗いたれば、汝らも互いに足を洗うべきなり。¹⁵ われ汝らに模範を示せり、わが為しごとく、汝らも為さんためなり。

「お前たちも互いに足を洗え」

とはどういうことですか。私たちは、キリストのなさったような足を洗うことはできない。けれども、キリストはいわゆる観念神学ではないですから。

「我の赦したるごとく、汝らも赦せ」

と。キリストの贖いの赦し、その執り成しをすることです、

「互いの足を洗え」

というのは。

「あいつはどうも汚い。こういう欠陥があるな」

なんて言っただけで、人の汚れを見ているのはサタンの心だ。それを黙って執り成して洗ってやる。キリストの聖霊の愛でね。これは正に聖霊の愛だ。御霊の愛でそれを包んでやる、洗ってやる、担ってやる。



「ああ結構だよ」

と、とがめない。

「敵をも愛せよ」

とキリストが言ったんだから。「敵をも愛せよ」というのは、

「敵をも担ってやれ、敵をも包んでやれ」

ということ。「愛する」というのは感情的に愛するということではない。愛するというのは、「救う、助ける」ということなんだ。これは御霊の力がきてればできるんです。執り成すばかりではない。できるんです。ヨハネ書簡に、

「互いに相愛せよ」

とある。あれと同じです。

「互いに足を洗え」

と同じことなんです、聖霊の力で。

「自分の目のうつばりを知らないで、人の目の中のゴミを見ているようなやり

方では偽善者だ」

とキリストが言われたが、その通りです。御霊の愛で洗っているんです。洗われた方では知らない。

「何かしらないけれども、うまいことになってしまったな」

なんて。そして、気がついてみたら、そういう深い友情に感激するわけです。

私の兄貴は本当に生き生きしていた。写真帳を見ると、兄貴の目が違う、非常に光っている。私よりかずつと上だ。そして本当に男らしく担う姿勢の人でした。

我々は自分が本当に破れなければ、生命は根も芽も吹かないんだ。殻が破れなければ、根が生えたり、芽が出たりすることがない。八方破れの人が本当の達人である。

他人の欠陥を指摘して、どうだこうだなんて言っているのは福音の世界ではない。それは全部赦し、包み、担い、忘れる。人の悪いことをいつまでも覚えていたりしてはとんでもない。

とにかく、自分が光となり、生命となり、愛となる。この三つは離すことができない。

これは三つの^{エル}だ。「ライト、ライフ、ラブ」、三^{エル}の実存だ。本当は四^{エル}だ。これはドイツ語だけれども、「ルフト」、気です。気の世界、霊気の世界です。「天地正大^{せいだい}の気」という。

「天地正大の気……」

秀でては不二の嶽^なと為り……

発^{ひら}いては万^{ばん}朶^だの桜と為り」（藤田東湖「正太之歌」）

という。

「よろずのものは神の気によって成った」

と、旧約聖書のヨブ記にも出ている。



だから、お互いに御霊の愛でもって担い、赦し、包み、助けて行きましょう。それがキリストが言われた意でありましょう。

キリストがルカ伝18章で、キリストの饗宴に何のかのと理由をつけてやってこない。御国の子らはやって来ない。

「それでは籬まがきの外からいろんな不具者たちやなんかを中に入れてしまふ。もうあとで嘆き齒はが齧がみしても知らんぞ」

と、キリストは激しいことを言われた。いわゆるユダヤ人たちは

「私たちは選民だ」

なんて言ったってダメだぞと、キリストは言っているわけです。そんなことをはつきり言うものだから、キリストは嫌われたんだ。

神の御国に入りそこなったらどうするんですか。誰も保証してくれませんよ。また、誰が保証したってダメです。人間の保証ではダメなんです。キリストと私たちの関係も本当に一对一の関係ですから。

「あの人が大いに保証してくれましたから、太鼓判を押してくれましたから」
なんて、そんなものはひとつも役に立たない。地上の肩書なんか一切ダメです、そんなものは。

使徒的な信仰というのは本当に、キリストとの関係に火花が散っているようなものです。そして、本当にキリストに十字架で洗足され、聖霊を注がれた、そういう洗足にぶつかって恵まれたのが我々ではないですか。洗足というのはそれだけの内容を持っていると、つくづく思います。

「汝の足を洗わなかったら、何の関係があるか」

とキリストが言われた。

「お前との関係は、お前を贖い御霊を注ぐ、そういう関係なんだ。その関係がいらないのか」

と。他にどんなものがあつたってダメです。空しいです。

「空くうの空なるかなすべて空なり」

という。そのかわり、この世界に入ったら、

「天地万物を全部我らに与えておられるんだ」

とパウロが叫びましたが、その通りです。宇宙を散歩するような気持です。青年諸君が雄大な気持を持っていないかったらダメだぞ。

●我となんじとの関係は永遠なり

「我もし汝を洗わずば、汝われと関係かかわりなし」

というのを、今度はもうひとつ積極的に読む。



「我なんじを洗いたれば、汝との関係は永遠なり」

と。そういう積極的な言葉に私は読みかえます。「洗わずば」ではない。本当にキリストは洗ってくださったんだ。だから、

「汝との関係は何ものもこれを切ることはできないぞ」ということ。

「キリストの愛から我らを離すものは何があるか」

とパウロがローマ書8章で絶叫しているでしょ。それがこれです。天上天下何がキリストの愛から我らを離すことができるかと。頭で聞いていたらダメだよ、全身で受けとつていなくては。いいね。

まあ、教会でも「かかわり」なんていう言葉をよく使うよね。何を言っているかと言いたくなる。相対的な関わりばかり問題にしている。これは絶対的なただ一つの関わりなんです。楽しいでしょ。楽しいし、力が来たでしょ。

私の兄貴は27歳で仆れるような、そんな男ではなかったんだ。だから、私は兄貴の分までやらなくては。兄貴の日記に、

「辰雄は質がいいから必ず何かやるだろう」

というようなことが書いてあった。期待していたようだね。

そういうわけで、

「我何事をもなしあたわず、キリストが一切をなし給う」

と。ということは、「任せる」というのは――いいですか、よく、

「お任せする」

と言うね――お任せして自分は何もしないでボヤツとしているのは、「お任せ」ではないですよ。託身というのは、全身を投入することなんだ、キリストの中に。託身すれば、必ず力が来る。力が来なかったら、それは任せているのではないんです、そんな任せ方は。キリストに自分を全身を任せたら、必ず力が来る。その力を受けとらなかったら、そんな任せ方は寝ぼけ任せだ(笑)。ダメだよ、そんなのは。絶対に行き詰まりませんから。

「知らないまにこんなに生命力が出てきたか」

なんて、あなた方は自分で驚くよ。まあ、私は自分で言ったらおかしいけれども、あと10年はこんな調子でやるでしょうね、おそらく。どこも何ともないものね。ちよつと嗅覚が悪いけれども。まあいいや、仕方がない。

そういうことで、

「我なんじを洗いたれば、なんじとの関係は永遠なり」

と。アーメンです。終わります。

